



## 7泊8日間の大きな学び

Park SeEun (SNUE)

7月29日、ずっと指折り数えて待っていた東京学芸大学でのSPTCプログラムが開始した。出発前は、韓日両国の政治・経済的な問題で周囲からの懸念が多く、私も大変心配していたが、国外の交流プログラムに参加するのは今回が初めてなので、ときめく気持ちで空港に向かった。

集合時間をあらかじめ知らずに飛行機のチケットを買ったため、集合時間より5時間も早く日本の羽田空港に到着した。長い待ちが終わって3時、ついに一緒にプログラムに参加する予定の韓国チームの教授と学生たちと会うことができた。オリエンテーションの時に一度会っただけだったので、よそよそしい雰囲気の中でお互いに挨拶を交わし、中国からの参加学生たちを待った。いよいよ宿所へ出発。市内から1時間くらい離れた宿舎まで、バスに乗って立川市にある MystaysTachikawa ホテルに到着した。ロビーで奨学金受領と部屋割りをした後、学芸大学の日本人サポーターたちと一緒に宿舎の周辺を見学し、韓国チームの学生や教授と一緒に夕食をして、初日を送った。

7月30日、本格的なプログラムが始まった。朝8時にサポーターズ学生たちがホテルのロビーまで来てくれて、プログラム参加者たちと一緒に地下鉄に乗って、これから7日間のプログラムが行われる東京学芸大学を初めて訪問した。

最初のオリエンテーションでは、東京学芸大学側のSPTCプログラム関係者の方々の紹介とプログラム参加者全員の自己紹介に続き、プログラムに対する説明やプログラム期間中の課題への案内があった。文化体験と学校訪問が多く、学ぶことの多いプログラムだったが、プログラムの参加者として準備しなければならないプレゼンテーションがなんと3回もあった。そのうち、1回は日本の小学生を対象とした授業用、1回はシンポジウム発表用、最後は個人別感想（8分程度）のプレゼンテーションだった。予想しなかった課題に少なからず当惑して心配になった。

その後、書道体験の時間があった。書道先生の書いたひらがなの名前を見ながら、2時間程度書道の練習をしながら指導を受けた。みんなの作品は東京学芸大学にあるキャンパスアジアラウンジの壁に飾られた。皆熱心に練習して作品を完成させたし、また何人の学生は中国の学生たちと名前交換をする親睦の時間を持った。書くときはよく分からなかったが、壁



に飾ってみたら、かなり素敵だった。

学校の食堂で昼ご飯を食べて、午後は「江戸東京たてももの園」を見学した。江戸時代の建物を数多く移築してきたミュージアムだったが、園内はかなり広く、見所満載だった。椿副室長の説明を聞きながら一つずつ見学できたが、興味深い所が多かった。今回は、厳しい暑さで全部の建物を見学することができなかったが、もし再び訪れる機会があったら、ぜひ全部回ってみたいと思った。途中で、涼しい休憩所に寄って飲み物を飲みながら、韓国の学生たちといろいろ話し合ううちに、少しずつ親しくなってくるような感じだった。

初日の最後のプログラムは、東京学芸大学側から準備してくださったウェルカムパーティー。副学長と副室長、関係者たち、韓国、日本、中国の大学生たちが集まって簡単な食事を取りながら、交流を深める場であった。自己紹介が続き、その後は、食事をしながら教育・文化などについて話し合う交流が続いた。まだ日本語で会話するのがぎこちなかったが、会話をするうちに、少しずつ慣れてきて、気持ちが楽になった。ウェルカムパーティーを終えて宿舎に戻ったのが9時、疲れて気がなかった初日が過ぎた。

7月31日、三日目の朝。サポーターの学生たちと一緒に東京学芸大学に移動し、キャンパスツアーを始めた。朝から気温が高く、キャンパスツアーはきつかった。キャンパスツアーを終えてから、キャンパスアジアラウンジに移動して、講義の開始を待った。あまりにも蒸し暑く、昨日のようなスケジュールだったらどうしようと心配していたが、午前・午後とも授業を受ける予定だったので、大丈夫だった。

最初の講義は韓国でも関心の高い教員研究活動がテーマだった。日本の教員研究活動に関する事例の説明を聞いてみたら、韓国の授業の奨学やコンサルティング奨学と類似点が多かったが、相違点もあった。それは、私たちは授業の進行と教授学習目標達成において、全体的なものを見るのに対し、日本では観察者が学生1~2人を選定して集中観察しながら、授業の奨学を行うとのことだった。二つの講義とも、韓・日・中三か国の教育における共通点と相違点がテーマとなっていた。教授との質疑応答もたくさんできたので、長時間だったにもかかわらず、楽しく参加できた。

この日の最後の日程として、「学芸の森保育園&学童クラブ」を訪れた。生後6か月未満の幼児から小学校入学前の児童たちのケアと教育を担当する機関だったが、大学の研究にも共同参加されたりするかなり高いレベルの教育機関だった。特に学童クラブの子供たちが「帰りの会」で自ら一日の日課についてまとめて口頭発表することや、学童を終えてから一人で公共交通を利用して帰宅するということがとても印象深かった。

8月1日、ついに初のプレゼンテーションの日が近づいてきた。世田谷小学校に訪問して20

分間授業を行う日！この日のために、韓国チーム5人の学生たちはぎりぎりの日程を終えてホテルに戻ってきたら、授業をどう進めるか、プレゼンテーションはどんなふうに準備するのかなどについて、熱い議論をしてきたが、ついにその日が来たのだ。

バスに乗って30～40分間を移動して、世田谷小学校に到着した。そちらも夏休み中だから、あるクラスの学生たちだけが出ていた。学校の様子は、韓国の小学校教室とは全く違っていた。最先端を走っている我が小学校の様子とは違って、幼い頃の学校を思い出す親しみのある様子だった。また教室以外の廊下や建物のあちこちが暑くて、今更自分の働く環境に感謝するようになった。

授業のテーマは、日本と韓国の違いについて3点挙げ、写真、英語、日本語で説明をしながら進行し、生徒たちにクイズを当ててもらった。学生たちがハングルには慣れていなかったが、かなり興味津々な授業が行われた。学生たちが積極的に参加する姿を見ると、夜遅くまで準備した甲斐があったと思った。授業後は学校側から準備してくださった釜飯にお茶漬けをして食べながら、先生たちと談笑を交わした。

午後は、日本の茶道体験があった。日本伝統家屋にある茶道体験場所を訪ね、日本の茶道についての説明してもらい、茶道の体験をした。普段はお茶を飲みながら談笑を交わすので、少しは賑やかな雰囲気だろうと想像したが、日本の茶道は厳粛で静かな雰囲気で行われた。礼法もまたややこしかった。しかし、伝統を大切に伝授し、受け継いでいくために努力する日本人の姿には感心した。

8月2日、午前には「情報通信研究機構」に訪問して、日本の先端科学技術について説明してもらった。特に、通信を通じて匂いを伝える技術は、我々がこれまで想像ばかりしてきたものであり、直接体験してみたところ、あまりにも不思議だった。昼食後、日本の伝統太鼓体験を終えて、中央区の中央大学附属中学校と高校を訪問した。小学校で勤務しているため、韓国でも最近の中学・高校における授業の様子や学校施設を見学したことがなく、韓国と比較することはできなかったが、大規模な図書館が非常に印象的だった。特に、日本の中学・高校では部活が活発に行われるということで、休み中にも学校に出て部活動に参加する学生が多いことに比べ、夏休み中もずっと試験勉強をして過ごす韓国の学生たちが、改めてかわいそうに感じることもあった。学校ツアーを終えた後、高校に勤める教員たちと話し合う時間があったが、韓国では教員の行政事務が増える一方、日本では部活指導が教師の業務過重になるという話を聞いて驚いた。他の国の教師と教師生活について話し合う時間は、毎回私の教職生活を振り返るいい契機となった。

8月3日、ついにシンポジウムの日が近づいてきた。学生たちの授業を準備する最初のプレ



ゼンとは違って、韓国教師としての難しさ、解決策を模索する今回のテーマは、あまりにも難しく、漠然としたものだった。各国の難しい点について発表して質疑応答・議論する時間を通じて、各国の教育事情にはそれぞれ異なる点があることに気づき、お互いの理解を深める時間になった。特に、現職の教師として、今回のシンポジウムに参加できたことは、私の教職生活において大きな財産になったと思う。

8月4日、最後のプレゼンテーションの日でもあり、最後の公式日程の日。今回のプログラムに参加した生徒たちが期間中に印象深かった内容について、一人8分間ずつプレゼンと質疑応答を受ける時間だった。最初は、どうやって全ての課題を成し遂げるのかとても心配したが、すべてのプログラムをうまく終えて感想を発表しようとする、感無量だった。韓国チームの学生たちはプレゼンを準備しながら、知らないうちに固い戦友愛が生まれたし、中国チームの学生たちも、日本の祭りに巡り合って良い思い出作りをしていたようだった。同じ時間、同じプログラムに参加したが、それぞれ感じた点は少しずつ違っていた。しかし、このプログラムへの参加を通して、生徒全員がさらに成長できたことは間違いないだろうと確信した。

心配と憂慮の中で参加した今回のSPTCプログラムは、最初から期待したとおり、私にとって大きなチャンスになったと思う。韓・中・日3カ国の人たちと交流しながら、個人の見聞を広げることができ、外国語の勉強をもっと頑張らなければならないと思った。教師としての自分をもう一度振り返ることができ、より良い教師、教師としての専門性を育てるためにすべき努力について考えることができた。プログラムで知り合った同僚の先生たち、貴重な人々に出会い、韓国でも交流を続けていけることができ、本当によかった。